

## 論文内容の要旨

専攻名	多文化社会学 専攻	氏名	楊 航
題名	中日単母音の音声学的比較研究		
<p>論文内容の要旨</p> <p>本論文は音声学、実験音声学理論及び音声パターン理論に基づき、中日対照の方法で日本語と中国語の母音パターンを作り、両言語の中の共通の母音について、比較分析を行った。そして、母音に影響する因子を考えると、もっともの影響因子は子音であると考え、前子音を調音部位と調音方法の両面から考察し、影響された母音がどう変位したのかをまとめた。</p> <p>母音に関する研究はまだたくさんあるが、主に一つの言語に注目している。研究者の母語ではない多言語を研究する論文もたくさんあったが、留学生を研究対象としているものが多く、それらの研究者自身もその言語を理解しないまま、データを通して、物理的な分析のみを行っていると言える。故に、多言語お互いの音声パターンの比較研究は未だに開発されていないと言っても過言ではないだろう。本稿の筆者は母語が中国語の留学生として、日本語能力試験の最高レベルN1の資格を持っている。また、日本の高校で三年以上中国語を教える経験を生かして、今回のテーマを設けた。</p> <p>本論文は四章によって構成されている。</p> <p>第一章では本論文の研究背景と意味、研究の基礎理論、研究内容及び研究方法を述べた。</p> <p>第二章では中国語と日本語の母音パターンについて、両言語共通の母音の音声学的位置の比較分析をした。母音パターンの実験法を用い、日本語の5つの母音と中国語の7つの第1フォルマント (F1)、第2フォルマント (F2) を計測し、得られたデータにより、音声学位置図や母音パターン位置図の構図を作成した。次に、円を書く手段で、日本語と中国語それぞれの母音パターンを表記した。最後に、日中の母音パターンにより、両言語それぞれの特徴、共通点及び相違点をまとめた。</p> <p>中国語の母音/uと日本語の母音/uの位置はかなり異なっていることが直ぐに分かる。中国語の/uは頂点母音の一つであり、もっとも後ろの頂点に位置する。しかし、日本語の/uは頂点母音ではなく、母音/i, oの間の中上の位置にある。両言語の母音/iは前後に関しては、ほとんど差がないと言える。中国語の母音/iは日本語の母音/iより少し上方の位置にある。</p> <p>母音パターンは母音構図や母音構えでも呼べる。この分析によると、極めて似ている発音でも、実際にはかなり大きい差があることが分かった。</p>			

氏名	楊航
----	----

第三章では、前子音が母音に与える影響について調音部位と調音方法に分けて実験を行った。同じく母音パターンの実験法を用い、両言語の頂点母音（中国語：/a/、/i/、/u/、日本語：/a/、/i/、/o/）、中間母音（中国語：/d/、日本語：/e/）及び共通の母音（中国語：/o/、日本語：/u/）から得られたデータにより、音声学位置図の構図を作成した。調音部位と調音方法に分けて各母音の第一フォルマントと第二フォルマントの数値を記録し、全ての例の平均値を求めた。そして、第二章で得られた母音のデータを整理し、各母音の第一フォルマントと第二フォルマントの数値も記録し、平均値を求めた。第二章で得られた母音の平均値は基準点として使う。最後に、二つの平均値の差を求め、平均値差の数値を比較し、音声学位置図を観察することで、母音は元々の位置からどういうふうに変位するのかを考察した。

調音部位から分析をすると両言語の母音/i/の位置は他の母音に比べ、明らかに変位された。調音部位に関わらず、中国語の/a、d/と日本語の/a、u、e/分布密度は相対的に高い。中国語では/a/の次に安定している母音は/d/である。日本語では/a/の次に安定している母音は/u/である。中国語の母音/u/はもっとも不安定な母音である。日本語の母音/i/はもっとも不安定な母音である。

調音方法から分析をすると中国語の母音/a、d/は分布密度は相対的に高く、他の母音より安定している。日本語の母音/a、u/は分布密度は相対的に高く、他の二つの母音より安定している。両言語母音/i/全部後方に変位し、中間母音の/d/と/e/はほとんど変位がなく、安定していることが分かった。中国語の母音/u/は前方に変位したが、日本語の母音/u/はほとんど変位がなく、とても安定している。中国語の母音/u/はもっとも不安定で、移動の幅がもっとも大きい母音である。様々の程度で前方へ変位した。日本語の母音/i/はもっとも不安定で、移動の幅がもっとも大きい母音である。様々の程度で後方へ変位した。

第四章では母音パターンの研究結論、子音と母音組合実験の研究結論及びこれからの課題についてまとめた。

本論の研究により、両言語の母音パターン及び前子音が共通の母音に与える影響について考察し、両言語共通の母音について初歩的な結論を導いた。研究は中日対照言語学研究的の補充になり、音声学の研究及び両言語の教育参考になると考えている。今後の課題としては、後子音が母音に与える影響、中日母音聴感分析、母音の長さ、中日母音習得等についての研究である。

キーワード：音声パターン、単母音、フォルマント、母音パターン、子音